令和５・６年度 千代田区教育委員会研究協力園

研究主題

探究の扉を開く

―自ら遊び、遊びを紡ぐ―

令和7年1月24日

千代田区立番町幼稚園

教育委員会挨拶

千代田区教育委員会 教育長　堀米 孝尚

千代田区立番町幼稚園は、令和5・6年度　千代田区教育委員会　研究協力園として、研究主題を「探究の扉を開く ―自ら遊び、遊びを紡ぐ―」と設定し、研究及び実践に取り組んでいただきました。

令和5年6月に示された新たな教育振興基本計画においては、国際情勢の不安定化や、グローバル化、DXの進展等、予測困難な時代において、未来に向けて自らが社会の創り手となることができる資質・能力を育んでいくことの重要性が示されております。番町幼稚園が本研究において、子どもたちが主体的に「もの」や「こと」といった環境に関わりながら、遊びを創り出し、変化させ、広げ、深めていく「探究」という過程は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児教育における根幹をなすものであり、区内をはじめ広く幼稚園・こども園・保育園等における幼児教育の充実に資する、大変意義深いものであると確信しております。

最後になりましたが、中村　千絵　園長をはじめ、本園教職員の方々の御協力と研究に対する真摯な姿勢に深く敬意を表すとともに、本園の研究に関して御指導・御助言を賜りました全ての皆様に心より御礼を申し上げます。

はじめに

千代田区立番町幼稚園 園長　中村 千絵

本園では、毎週「番町ビルドアップ会議」を行っています。園の教育をより良くするための会議であり、参加者は、担任も支援員も必ず発言をすることになっています。この中で、子どもの読み取り方、援助の方向性など様々なことが話題になり、「保育を語る」時間となっています。思い返すと、私自身が担任であった時に、先輩の先生方から「保育を語る喜び」を教えていただいたように思います。この時に、本当に小さな子どもの動きや言葉に子どもの気持ちが表われていることを学びました。この「保育を語る喜び」を他の園や他校種の方々とも共有できたらと考えて、本園では、様々な取り組みを行ってきました。「探究」は、乳幼児教育から高等教育にまで使われる視点です。今回の本園の「探究」についての研究が、施設類型や校種に関わらず、教育に関係する方々に、少しでも、「共に」子どもたちの未来について語り合えるきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、共立女子大学教授　田代　幸代　先生には、2年間を通して、若手中心の研究と保育を支えていただき、誠にありがとうございました。また、千代田区教育委員会　堀米　孝尚　教育長をはじめ教育委員会の皆様に心より感謝を申し上げます。

Ⅰ．主題設定の理由および研究の仮説

本園の実態

前身となる番町尋常高等小学校附属幼稚園から135年の歴史をもつ。周りに学校の多い文教地域であり、教育熱心な保護者が多い。幼児は、家庭や地域に愛され育っていることで、穏やかであり、大人への信頼感も高い。また、明るく素直であり、好奇心も強い。反面、「できない」と感じることへの苦手意識があり、大人からの評価を気にする部分もある。

令和5年度の研究

地域や幼児の実態から、「主体的に物事に取り組む幼児」を育てることが重要であると考えた。主体的な遊びのためには、どのような環境や教師の援助が必要なのか研究を深め、さらに、主体的に遊ぶことで、幼児の経験が深まっているかどうか検証を行った。その結果、主体的であるだけでなく、遊びに目的や方向性をもち、試行錯誤すること、すなわち、「遊びの中で探究していく」ことが必要であると分かった。

探究とはなにか

幼児の遊びの中で「探究する姿」について記録を取り、事例検討していく中で３つのことが分かった。①自ら関心をもって取り組んだ遊びは集中力が高く、より試行錯誤を繰り返すことから、主体的に取り組むことが重要である。②探究とは過程であり、どのような遊びが生まれたかではなく、その遊びの中で幼児が何を経験していたかが大切である。③探究は１本の道に沿って進められるのではなく、遊びの中で試行錯誤があり、教師や友達の言動にも影響を受けながら、紡ぐように遊びを幼児が創り上げていくことが大切である。

本研究における「探究」

幼児が主体的に環境に関わる中で、遊びを創り出し、「もの」（環境・友達・教師など）や「こと」（遊びの技術・過去の体験など）に影響されたり、取り入れたりしながら、試行錯誤し、遊びを変化させ、広げ、深めていく過程

主題設定の理由

幼稚園は、生涯における初めての学校であり、多くの幼児にとって初めて家庭以外の社会に一歩を踏み出し、様々なものやことに出会う時である。この出会いの時に、「探究する」ことの楽しさを感じることが、生涯の学びにつながると考え、以下の研究主題を設定する。

「探究の扉を開く ―自ら遊び、遊びを紡ぐ―」

幼稚園教育要領
身近な環境との関わりに関する領域「環境」
周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

OECD(経済協力開発機構)「Education 2023」
「ラーニングコンパス」…2030年に向けて必要な能力の再定義と学習フレームワークが描かれている。これには、生徒が、未知なる環境の中で自力で歩みを進め、進むべき方向を見つけ舵取りをするという意味を込めて、コンパス（羅針盤）と名付けられている。

研究の仮説

一人一人の幼児が、自ら遊びを楽しむ中で、様々な「探究」をすることで、幼稚園教育における資質・能力が育まれる

Ⅱ. 研究の方法

研究保育および事例検討、また、区内の公私立保育園保育士・小学校教諭・区内他幼稚園教諭も参加する協議会（「ふらっと番町」）を開き、仮説を検証し、幼児教育における「探究」について考えた。

「探究する姿」とはどのような姿か

園内での研究保育、「ふらっと番町」、事例検討から、幼児のどのような姿を「探究する姿」と捉えるか、理解を深める。この中で、発達段階により探究する姿に変化が見られることが分かった。

発達段階による探究の姿

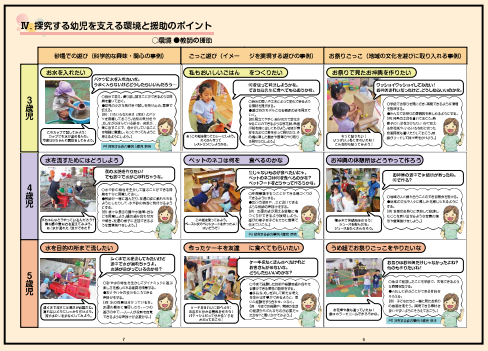
p.4～6　Ⅲ 探究する幼児の姿

3歳児	4歳児	5歳児
ものと向き合い、探究を深める	友達とのゆるやかなイメージの下、自分の探究を楽しむ	これまでの経験を生かしてものと関わり、友達と協同して探究を進める

探究に必要な環境と援助は何か

p.7～8　Ⅳ 探究する幼児の姿を支える環境と援助のポイント

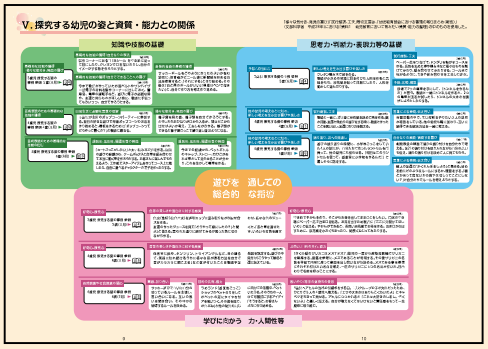
研究保育や事例検討から、幼児が探究する姿には、その探究を支える環境や教師の援助が必須であること、また、発達段階や幼児の実態に合わせた環境や教師の援助が大切であることが分かった。
1学期に各学年で行われていた遊びの一部を切り取り、幼児の姿から探究を読み取り、この幼児の探究を支えている環境や教師の援助について明らかにした。



探究と資質・能力との関係

p.9～10　Ⅴ 探究する幼児の姿と資質・能力との関係

幼児の探究する姿が「幼稚園教育において育みたい資質・能力」につながっているかを検証するために、遊びの事例の中で、特にこの部分につながっているのではないかという幼児の姿を整理した。



9～10ページの表の中の「様々な気付き、発見の喜び」「試行錯誤、工夫」等の文言は、「幼児教育部会における審議の取りまとめ（報告）」（文部科学省　平成28年）における「資料1　幼児教育において育みたい資質・能力の整理」の中のものを使用した。

Ⅲ. 探究する幼児の姿

1.事例 3歳児5月「お水を入れたい！」

幼児の姿の読み取りと教師の願い

5月、幼稚園での生活に慣れてきて、保育室の目の前にある3歳児専用の砂場で遊ぶことを楽しみにして登園する幼児が多い。好きな遊びの時間になると、裸足になって、足や手、全身を使って砂や水の感触を楽しみながら遊んでいる。タライから何度も水を汲んでは流すことを繰り返す幼児、高い位置から水を流して砂の形が変わることを楽しむ幼児、水を含んでトロトロになった砂を両手ですくい、自分の足にかけて埋めようとする幼児など、楽しみ方は一人一人異なる。そのような一人一人の楽しみ方や試しができるような空間や時間の保障の他、様々な遊具を視界に入りやすく扱いやすいところに出しておいた。

3歳児の探究

3歳児5月

ものと向き合い、探究を深める	友達とのゆるやかなイメージの下、自分の探究を楽しむ	これまでの経験を生かしてものと関わり、友達と協同して探究を進める

本事例における幼児の姿　5月23日

A児はタライから水を汲みたいと思い、大きなバケツを持つ。
両手でバケツを持ち、タライに対して垂直に入れるためバケツに水が入らない。

教師は、A児の姿を見守りつつ、近くにあった小さな型抜きのカップに水を入れるところを見せる。

A児は教師の姿を見て「それがいい」と教師の手から型抜きカップを取り、水を入れる。教師は「お水入ったね!」と声をかける。
A児は一瞬笑顔になるものの、大きいバケツにたくさん水を入れたかったようで、再び大きなバケツを両手で持つ。
A児はちょろちょろと水の出るホースを持って直接バケツに水を貯めようとしたり、小さな型抜きカップで汲んだ水を大きなバケツに入れたりする。

そこにB児がバケツを斜めにして水を汲みに来て、勢いよく砂場に流すことを繰り返す。

A児も同じように大きなバケツを斜めにすると、勢いよく水がバケツに入っていく様子を見た後、教師を見る。
教師は、「今度は、このバケツでもお水がたくさん入ったね!」と声を掛けると、A児は笑顔になり、その後も何度も水を汲んでは、砂場に掘ってある大きな穴に水を入れる動きを繰り返す。

本事例における探究の姿と「幼稚園教育において育みたい資質・能力」との関わり

平成２８年中央教育審議会の別紙の図より、特にこの事例に関わる文言を入れた。

- 水の量、深さに対して、容器をどのように動かすと水を入れることができるのか試す姿
  教師や友達の姿を見て、取り入れようとする姿
- タライの水の深さに対して大小様々な大きさや深さの容器を試す姿
- 水で遊ぶ楽しさを感じ、大きなバケツにたくさん水を入れたいと思ったり、勢いよく穴に水を流したいと思ったりする気持ち

2.事例 4歳児5月「ペットのネコは何を食べるのかな」

幼児の姿の読み取りと教師の願い

C児D児E児の3人は、自分で作った耳やしっぽを付け、ネコになりきって遊んでいる。みんなで同じものに変身し、「ニャア」と鳴くことが楽しいようだ。教師は、ネコごっこの楽しさを仲間で共有しながら、一人一人の幼児が自分なりに考え、工夫してほしいと考え、ネコとしての動きが引き出せるような食べ物や猫じゃらしなどの遊びの種を蒔(ま)くことにした。

4歳児の探究

4歳児5月

ものと向き合い、探究を深める	友達とのゆるやかなイメージの下、自分の探究を楽しむ	これまでの経験を生かしてものと関わり、友達と協同して探究を進める

本事例における幼児の姿　5月27日

C児D児E児の3人は、ネコになり、積み木で自分たちの家を作って遊んでいる。家が出来上がると、C児は画用紙をくしゃっと丸めて「これ魚ね」と言う。

一目で“魚”と分かることで、友達とイメージを共有しながら、遊べるものになるとよいと思い、教師が「先生はこの魚を食べるにゃー」とビニール袋に京花紙を入れた魚を提案する。C児とD児はビニール袋に細かく切った画用紙を入れて魚を作る。

C児とD児が、教師と一緒に魚を作っている様子を見ていたE児は、同じ魚ではなく、「ペースト状のキャットフード」を作り始める。
製作コーナーからクリーム色の画用紙を選び、細長く折って中身を作る。次に、黄色い画用紙を中身よりひと回り大きく折ってパッケージも作る。教師に商品名を書いてもらって完成する。

E児は「私もごはんを食べるにゃー」と言い、ネコになりきりながら、自分でくわえたり、教師や友達に食べさせてもらったりして楽しむ。

本事例における探究の姿と「幼稚園教育において育みたい資質・能力」との関わり

- ネコになりきるために言葉や動きを工夫する姿
  キャットフードを本物らしく作るために、紙質や紙の色、大きさ、形などを工夫する姿
- 自分のネコごっこに必要なものを作り出そうとする姿
- 自分のもっているネコの情報から、よりネコらしくなりきるために必要なものが何かを考えようとする姿

平成２８年中央教育審議会の別紙の図より、特にこの事例に関わる文言を入れた。